

日中の狭間に見る周作人

—1920～30年代における日本の国民性を中心に—

李 瑾

目次

- I. はじめに
- II. 周作人の日本に対する位置づけ
 - 1. なぜ日本は第二の故郷なのか
 - 2. 日本研究を行う重要性を訴える
- III. 1920～30年代の日本人における行動の二面性に苦慮する
- IV. 1920～30年代の日本における忠君愛国の二面性
 - 1. 「日本管窺」における万世一系論の表の意味
 - 2. 「日本管窺」における万世一系論の裏の意味と忠君愛国の二面性
 - 3. 外国人が万世一系を理解する意義
 - 4. 万世一系に理解を示す経路
- V. 結びと今後の課題

I. はじめに

周作人の日本研究については、これまで多くの学者に論じられてきた。周知のように、戦時中、周作人が日本軍に協力したことで、その文学は戦後の長い年月にわたり中国の文壇に封印されてきた。しかし、近年その文学の解禁により、新しい文献や資料が再び世に噴出して研究の幅が広められるようになった。それと同時に、戦前戦中におけるその他の中国人文学者による日本研究の書籍も徐々に再出版をされるようになった。

中国において、いち早く周作人の日本との関わりについての研究に取りかかったのは銭理群であった。1990年、彼は限られていた資料をもとに『周作人伝』を執筆し、文学者としての周作人の生涯を再現するとともに、中国近現代文学における周作人文学が果たした重要な役割を訴えた。その中では周作人の日本留学期間中における生活ぶりや文学活動などを詳

細に紹介し、彼の日本文化に対する愛着を論じ、文学者として成長していく道筋を辿っているのみならず、戦前戦中における周作人の日本研究についても戦争分析論の視点に基づきながら、研究を展開している。

上記のように、中国では十年前まで周作人の日本研究に関する論述は、政治を念頭においたものが主流となっていた。しかし、近年では政治の色が褪せた研究の動きが徐々に芽生えるようになった。2007年に出版された哈迎飛著の『半是儒家半是积家——周作人思想研究』はその代表作といえよう。その著書は、周作人思想に潜む儒家精神と积家精神の解説を軸に、彼とキリスト教文化、中国の民間宗教文化、日本文化、ギリシャ文化との関係を論じ、中国における文化の転換や新文化の創立に関する独特な見識と多大な貢献を明らかにした。また、周作人がかねてから日本研究を行う理由を、近代中国の文化転換の道探しにあると指摘している。

一方、日本では周作人は戦前からその名を知られていたのである。1944年に出版された方記生編『周作人先生のこと』はその裏づけといえよう。その中でも日本の武者小路実篤や谷崎潤一郎、佐藤春夫などの名高い文学者たちがそれぞれ周作人について語り、評価している。また、周作人の作品は戦前から一部翻訳され、戦後、日中の国交が絶えていた時代においても、それを目にすることが時々あり、一戸務や松枝茂夫、木山英雄、飯倉照平などのような周作人の研究者も輩出した。

その中で、周作人の「日本論」に注目した研究としては木山英雄の著作が挙げられよう。1970年代に中国国内の政治的な理由から直接入手するのが困難であった資料を香港や台湾経由で入手し、それをもとに『北京苦庵記 日中戦争時代の周作人』を出版し、日本に協力したとされた期間における周作人の活動などを明かした。その後、中国における周作人研究の政治的なタブーが解かれ、多くの新事実が世に公開された。木山はそれをもとに、2004年には『周作人「対日協力」の顛末——補注『北京苦庵記』ならびに後日編』を出版した。また、1973年に周作人による「日本論」の文章を精選し、翻訳を行い、自らの「周作人と日本」という論述を加えて『日本文化を語る』と名づけて出版した。2002年にはその新版を『日本談義集』という書名に改めた。木山は上記の書籍では周作人の文学者としての経歴をまとめ、日本占領期間中の彼の活動や文学革命時代における日本文学の啓蒙活動、二十年代初期に展開する「生活の芸術」論、二十年代の後半に行われた一部の日本批判、三十年代における親日と抗日の間での苦渋に満ちた日本研究とその研究が彼に日本研究を断念させた関連性などについて論じている。

木山に続いて、周作人と日本の文化の関連性について積極的な研究姿勢を見せているのは伊藤徳也と小川利康である。伊藤は周作人日記の研究から着手したが、その後、周作人の審美観や倫理観を中心に研究を進め、2012年にはその大作『「生活の芸術」と周作人』を出版した。文化の視点から周作人思想の主幹を探究した伊藤はその著作において、周作人の「生活の芸術」論と日本文化との関連性を論じている。また、五四時期における周作人の異文化を受容する態度や、彼と中国民俗学者である江紹原とのかわりについての小川の論考も周作人研究の新たな開拓となっている。

さらに、在日中国人研究者によって行われている周作人と日本文化に関する分野の研究成

果も著しい。近年、劉岸偉の『東洋人の悲哀——周作人と日本』と『周作人伝 ある知日派文人の精神史』をはじめ、于耀明の『周作人と日本近代文学』、呉紅華の『周作人と江戸庶民芸』などといった、周作人と日本のかかわりを深く論じた研究書が出版されている。

上記のように、現在、日中における周作人研究は概観から細部まで深められてきている。しかしながら、日中関係が緊迫していた1920～30年代に、周作人が日本の国民性について解明しようとしたことに焦点を絞って、その経緯や結果などが周作人文学にもたらした影響を論じた研究はまだ見当たらない。

本稿は最新の文献や資料をもとに、先行研究を踏まえ、周作人が文学を通じて1920～30年代の日本人に特有の国民性をつきとめた経緯を明らかにし、彼がその国民性を理解した意義について考察したい。

II. 周作人の日本に対する位置づけ

1. なぜ日本は第二の故郷なのか

周作人は「東京を懐う」¹⁾の中で、「私は東京に続けて六年暮らしたにすぎない。しかしそこは私の気に入る、第二の故郷の感を抱かせた。」²⁾と述べ、東京のことを忘れられずによく思い出すことを明かしている。その理由について、日本の旧式の衣食住への愛着と、新書も古書も購入できる逸楽の二点を挙げている。

また、日本の旧式の衣食住を好む理由を次の二点に分け、詳細に語っている。一点目は個人の性分と習慣で自然に慣れ親しんだからであり、第二点目は思古の幽情によるものである。

同じ中国南方出身で日本留学経験者の蔣百里³⁾が日本人について下記のように述べている。

日本人の入浴や服装、飲食、住居などの習慣から見れば、中国の南方から移り住んだ人種であることは疑う余地がない。当然、その中には中国の山東省と高麗など北部から移住した者も一部いる。しかし、それは主流ではない。それで、北方の風格は日本では見られないのである。実際、北方の寒々とした生活は日本人が耐えられるものではない。・・・中国の東三省、いわゆる「満州」には、日本が二十年前にも移住をしようと考え、ここ五年で自由に移民することができるようになった。しかし、統計の数字は雄弁であり、我々に日本のこの移民の企みが如何に失敗したかを確実に伝えてくれる。日本人はいかに北方へ行きたがらないものである。⁴⁾

蔣百里の、日本人のルーツについての論説の正確さはさておき、この文章から当時の日本では入浴をはじめ、服装や飲食、住居などの習慣が中国の南方に酷似していることが汲み取れる。また、日本人が気候や習慣などの違いでいかに中国北方での生活を厭うのかも分かる。裏を返せば、中国北方出身の留学生たちが日本で留學生活を送る際の苦悩も想像できる。蔣百里が描く日本の生活習慣から見て、中国の南方の出身であることは、周作人が日本での生活に愛着を持つことになるという点において重要な役割を果たしていると思われる。

また、銭理群(1990)も日本についたばかりの周作人が「はるばる海を越え異国の地にた

どり着いたのではなく、まだ自らの故郷と親しい人々のそばにいたのだと勘違いをしてしまった。」⁵と論じている。その根拠は周作人が下宿先で少女の裸足姿を目にして故郷の田んぼで働く女性たちのことを思い浮かべたからだとしているが、やはり中国の南方と似たような生活習慣をみて、周作人が日本への親しみを覚えたと指摘している。

さらに、近年では胡令遠と王盈（2012）が周作人の日本研究には中国の江南文化が大きな役割を果たしていることについて詳細な研究を行っている。⁶

もう一点、思古の幽情については周作人が次のように説いている。当時、彼は漢民族として反清王朝の革命精神を持っていたため、唐宋文化の名残がある日本生活に一種の懐かしみを覚えた。和装を好んで身に着け、書信の住所には清国と記すのを嫌がり、好んで支那を用いた。つまり、周作人にとって留学時代の日本は、生活環境に不自由がなく、文化的にも清国より中国らしさが感じられる国であった。

では、新書と古書の購入できる逸楽は周作人にとってどんなものであったか。

1936年に発表された「東京の書店」では、当時購入した書籍について詳しく書かれている。日本語をマスターしていないこともあり、彼が購入したものの大半はやはり英語と中国語の書籍であったようだ。古書は中国の古典や小説が中心であったが、洋書は文学と人文社会の分野にまで及んでいた。それらの洋書から、周作人は文学に関する見聞を広めただけでなく、人生観や社会観など彼独自の見解を確立し、磨いていったのである。周作人にとって日本は、彼の思想の「育ての親」であると言っても過言ではないのである。「東京を懐う」の中で、北京には古書しか売られていないと愚痴をこぼすほど、留学生活にあったその逸楽に対する未練を語っている。

また「日本と中国」⁷の中では下記のような記述がある。

日本の新文学なども私どもに資するところが大である…その新文学発達の歴史も中国とほぼ同じく、ちがうのは一足先に動き出し、より速く進歩したことくらいだろう。だから、明治文学史を開いてみると、思わず、いちいちが三十年先の中国文壇の運勢を予告する推背図でもあるかのような錯覚にとらわれる…ここ二十五年ほど歩んできた道がほぼ日本のと同じであって、私どもは中華民国の新文学がすでに黄金時代を迎えたように思っているけれども、実は今にしてようやく明治三十年 1897 前後のあたりまで辿りついたところだ、というのである。日本が代わりにやってくれた古代文化の保存や新文化の実験は、十分私どもの利用に値するのだ。ただしそれにつけても、私どもは自身の汚濁と墮落にも一層深刻に思いを致すべきだろうか。⁸

文学の発達は人間社会の発達に伴うことは言うまでもない。日本文学は三十年後の中国文学が歩む道であると指摘する周作人の目には、三十年先の中国社会が映ったのではなかろうか。彼にとっての日本は懐かしい歴史的な「中国」を体験できたのみならず、自分を文学者に育てた土壌であり、未知の中国の未来像をも眺める国であるゆえに、第二の故郷と名づけたに違いない。

最後に、周作人は下記のように「東京を懐う」⁹の中で、母国に対する譴責と怨嗟は愛国心

があつてのこととし、外国なら少々遠慮が生じ、その完璧さを求めるあまりに咎める必要もないと論じている。

郷国に対し情あればこそ、かくも無情に似た譴責や怨嗟を投げかけるわけである…私は故郷や祖国に対し、今日はお天気がどうもアハハ式の態度が取れそうもない。外国の場合なら、少しは遠慮するのが当然だろう。むやみに追従を並べる必要はないとしても、毛を吹いて疵を求めるまでに完璧を要求するには及ぶまい。¹⁰

しかし、二十年代の後半から彼自身の日本に対する一部の視線は徐々に厳しさを増していった。日中関係の悪化に研究者としての冷静さを失ったことよりも、彼にとっての日本は純粋な外国ではなく、第二の故郷であることをも考えるべきではなからうか。

2. 日本研究を行う重要性を訴える

日本については、今日の中国においても、古代中国の影響を深く受け、同文同種であると曲解されていることが多いようだが、当時はなおさらであった。日本の留学経験を持つ胡漢民¹¹が戴季陶の『日本論』に序を寄せる際には下記のような日本観を持っていた。

地理的には近く、文字は半分同じであり、風俗と習慣は似たようなものである…¹²

また、前文で引用した蔣百里の一文にも日本人は「中国の南方から移り住んだ人種であることは疑う余地がない」という記述があり、さらに彼は次のようにいう。

もし日本文明の中から、欧米から輸入した機械と科学、中国、インドから輸入した文字と思想を取り除いたら、何が残るのであろう…¹³

中国の南方から移り住んだ人々は中国の文字を用いてその思想まで輸入していると認識し、やはり「同文同種」の考えを示している。

しかし、周作人の見識は甚だ斬新的であった。

中国と日本は同文同種などという間柄ではないが、文化の交流があつたお陰で、さすがに思想はいくらか理解しやすく、文字も習いやすい方ではあるから（もっとも反面では、日本文の中になまじ漢字の混っていることが、中国人の透徹した日本理解を妨げていると私は思うのだが）¹⁴

同文同種ではないが、文化と交通の便で思想を理解しやすい、文字を習いやすいと主張している。しかし、日本語文に混じっている漢字は中国人が日本を深く理解する際の障害にもなっている。後に、「日本語について」の中でも彼はそれについて力説した。木山英雄が

「漢字の自家筋にあたる中国人の言語論としてはいわれない自大感覚や、中日「同文同種」といった互いにダメにするところのある誤謬への批判となる」と指摘している。

周作人は日本と中国が同文同種ではないと訴えたうえ、さらに中国における日本研究の必要性を呼び掛けている。

中国には、その独特な地位からして、特に日本を理解する必要と可能性とがある。だが、事実はさにあらず、みな日本文化を軽蔑し、昔は中国を、今は西洋を模倣しているだけで一見の値打もない、くらいに心得ている。なるほど日本の古今の文化が中国と西洋に取材していることは本当だ。しかし一通りの調合を加えてそれを自分のものとしたところは、あたかもローマ文明がギリシャより出て自ら一家をなしたのと同じである。(日本の成功はローマ以上かもしれない。)したがって日本に固有の文明があるといっても何ら差し支えはなくそれは芸術と生活の面において特に顕著である。ただし、哲学思想と呼べるほどのものは何もないが。わが中国はそれを一個の民族文明として公平に研究するばかりか、さらに特別な注意を払うべきだ。というのは、そこに、私どもが本国の古今の文化を研究する際の参考となるところが多々あるからで、かように実利の点からいっても、日本文化は中国人にとり今日ないがしろにできぬ研究対象なのである。¹⁵

周作人は、日本が古代中国と現代の西洋を模倣し、一顧の価値もないという誤謬を一蹴し、日本には独自の文明があり、研究すべきであると熱弁している。しかし、前文の引用でも分かるように、その後十三年経っても日中は同文同種であり、日本文明から西洋と中国、インドの影響を取り除いたら、何も残らないという主張が横行していた。知性に溢れ日本留学の経験を持つ胡漢民と蔣百里でも、周作人の見解を黙殺するほど、中国では日本文明を軽視する偏執がいかに根深かったかということが分かる。

中国人が持つ外国文化に対する傲慢さは日本文化に限らないようである。胡漢民は下記のように述べている。

ヨーロッパに留学した中国人たちがヨーロッパを批評する完全な研究を検索してみれば、比較的立派な著作はまだ誕生していないようである。¹⁶

当時は日本どころか西洋文化への研究も疎かにしていたのが実情である。

さて、中国で日本研究が行われない理由は他にもあった。周作人は「日本と中国」の中で、さらに指摘する。

中国人には一種の自惚れがあって、外国文化の研究にはあまり向いていない。少数の人々はそいつをおさえてまずは公平な観察ができるかもしれないが、それでも自尊心を傷つけられれば、冷静ではいられない。¹⁷

自国の古代文明に耽溺し、他国のものを顧みない中国人の短所をずばり指摘している。し

かし、それと同時に、当時の日本人が中国人の自尊心を傷つけていることも中国で日本研究が行われていない一因と分析している。

また、同時代では戴季陶も『日本論』を展開していた。その中で、当時の留学生が日本研究をしない理由は二つあると論陣を張っている。

第一 実利主義の害を受けているからである。

第二 自惚れ思想の害を受けているからである。

実利というのは、日本で日本語を習うより英語を習ったほうが、帰国後の出世に有利であることを指す。多くの留学生が日本を通じて西洋を学んでいたことを立証する周作人の文章もある。そもそも周作人自身も留学初期にはギリシャ語を学んだり、洋書の購読に夢中になったりしていた。

中国人が自惚れていると初めて指摘したのはおそらく福沢諭吉である。¹⁸ 周作人も戴季陶も彼の作品に目を通して可能性が高いが、自惚れの国民であるこの二人がその意見を素直に受け入れられるには余程の器量が必要であった。

III 1920～30年代の日本人の行動における二面性に苦慮する

二十年代に入り、日中関係の悪化で次第に中国本土において醜態をさらす日本人が増えていった。その時代における日本人の乱暴ぶりを中国旅行に出かけていた谷崎潤一郎や佐藤春夫なども手記に残している。

谷崎潤一郎は「蘇州紀行」の中で自分の案内役をしてくれた日本人の若者について下記のように振り返っている。

その外にもう一人、紺の背広に烏打帽を被った、支那語の非常に流暢な、十七八の小僧が居る。弁当のお余りが貰ひたさにうごうちやと寄って来る駕籠舁きや苦力どもを相手にして、この小僧が何か頻りにと肩を怒らしつつ威張り散らして居る。

……

しかし此の小僧のやうに、十七八の時分から支那人を犬猫の如く取り扱ふ事ばかり覚えて、それで一角の豪傑になった積りの日本人ばかりが、支那に沢山入り込まれては支那も随分迷惑だらう。とは云ふものの、此の小僧が小生意気なのは無論親が悪いのである。

「日本人を儲けさせるのはようございますが、支那人にお金をやるのは一文でも惜しうございますから。」と、先刻駕籠舁きと談判する時に女将は云った。私は其の言葉がひどく癪に触った。

……

折角遊びに来てもさう云ふ野卑な同胞に遇ふは、あまりいい気持がしない。此の女将なぞは女だから仕方がないとして、先づ男子から支那人に対する態度を慎重にして欲しいものだと思ふ。¹⁹

谷崎が威張り散らす小僧や野卑な同胞などという痛烈な表現を用いるほど、戦前、中国に滞在する日本人は乱暴であった。

佐藤春夫の「大陸と日本人」²⁰は日本見物をしたモンゴル人は日本人の親切さと柔和さに驚き、日本人には二手あるのであろうかとそろって口にすることから始まっている。なぜならば、日本で会った日本人はモンゴルで会った日本人とは雲泥の差があるからというのである。また、旅行先の大連で、悪行をする日本の商人に対し、それでも日本人かと憤慨する別の外国人の発言を耳にすることもあった。こういった「日本人には二手ある」のかという疑問に対し、佐藤春夫は下記のように回答している。

蒙古にいる日本人——申すまでもなく軍人のうちで成績があまりよくなくて奥地に回されてそれも荒漠たる地方で気の荒くなって存分に威力を発揮している。…「二手ある日本人」のうちの下手のほうばかり、と云わないまでも大部分がそれであったと思われる。…否大陸進出の急先鋒はこの種の人々にのみ可能なのかとさへ思ふ。

佐藤春夫における差別的な表現や考え方はさておき、「大陸と日本人」の中からも当時の中国に滞在する日本人の横柄さを垣間見ることができる。また、佐藤春夫はそのような乱暴な働きぶりを見せる日本人を日本本土にいる親切な日本人とは区別して、「下手のほうばかり」と称していることから、日本人には上品な日本人と下品な日本人の二種類いると解釈したのが分かる。

当然、日本文学研究者らが書き残している日本人の中国大陸での乱暴な振る舞いを周作人が見逃すことはなかった。やがて彼は支那通、浪人に加え、中国で発行されていた日本の漢字新聞や日中に関わる政治事件などについての痛烈な批判を始めた。²¹しかし、それと同時に日本で生活する際に出会った優れた日本の国民性を語る「日本的人情美」や中国の古き良き文化を伝承することを紹介する「日本と中国」、などの文章も発表している。その詳しい内容については中国では銭理群、日本では木山英雄、伊藤徳也、劉岸偉らが研究を行っている。木山氏はこれら文章を「異例な時局発言の色合を帯びて」と指摘し、「異例の直截さに富んでいるものも、主に漢字紙、浪人、支那通といった現象面をとらえ、皮肉や諧謔をも弄しているその中に、節度と時にある一種の手加減が感じられる。」²²と述べている。

日中関係が悪化する中、日本から帰国した中国人留学生の多くが反日的な思想をもつようになる。それに対して、かれらが留学中に下宿の大家や警察のいじめを受けたからではないかと推測する日本人がいる。それを受け、周作人は「留学の思い出」の中で自らの留學生活を追懐しながら、そのような事態がなかったと熱弁を振っている。一方では、中国人留学生が帰国後に反日に走ってしまう理由を下記の二点にあると指摘する。

いったん日本に留學した人間は…相当期間日本の生活と文化に触れたあげくに、たいがい一種の好感を抱くようになるものである。…ところで、その人間が本国に帰って、かねてからの日本の印象に反するような事柄を目撃したならば、彼はたちまち日本を知らぬ人間よりずっと深い不満を覚えるだろう。これがその一。またいわゆる支那通が、

英米の宣教師に追隨して、中国の悪徳をほめるような本ばかり書き、芸者買いや賭博や阿片の記述だけかと思えば、春秋列国やら三国志の故事などを材料に取って手当たり次第に慢罵を加えたりする。日本文が読めなければ気づきもしないが、あるいは気づいても外国文人のつねと思えば腹もたつまいが、留学生とすれば、日本国内ではこんなことはないし、西洋に対してもこんなふうではないことを知っているばかりに、不服の萌して来るのは如何ともなしがたい。こうして些細なところからだんだん大問題に発展してゆくわけだ。これがその二。²³

彼は当時の中国で目の当たりにした横柄な日本人や日本に関連する様々な不愉快な事件を批判しながらも、それと全く異なる日本と日本人がいることをはっきりと伝えている。その淡々とした文面と裏腹に、現実には現れてくる日本と自身の記憶に刻まれている日本、そして自らの文学視野に実在する日本文学者との差に悶え苦しんでいた周作人がいることが目に浮かぶ。佐藤春夫が日本人には「下品」と「上品」の二種類の人間が存在すると簡単に片づけてしまっている。彼が日本人でいるので、それができるかもしれないが、大学教授で知日派などとして知られる周作人は、第二の故郷に対する思いもあって、それについて適切な説明を表明しなければならないという使命感があったはずである。「人情美」が溢れる日本人がなぜ「醜悪愚劣」な行動をとるのか、周作人はそれに対する苦心惨憺な説明を続けながら、民俗学の書籍や歴史文献の中からそれを解明できるものを求め始めていた。

我々は日本に対して興味を湧き、その事情を知りたい。しばらく文学と芸術の方面で模索したら、初めて半分の労力で倍の成果を得るには国民の感情生活に着手してこそ入口が見えてくるのだと思うようになった。私は宗教が最も重要だと考えている。しかし、直入することがかえって回り道となるので、まずその周囲に着目した。民間の伝承はまさにその絶好な道である。²⁴

周作人のいう「民間の伝承」とは『古事記』や『遠野物語』などのことではなかろうか。日本人がとる二種類の行動を解明するために、後に彼が『古事記』と『遠野物語』の抄訳を行ったと思われる。この詳細は後半部の日本における忠君愛国の国民性のところで論じることにするが、ここではルース・ベネディクトの『菊と刀』の内容を引用しながら、戦時中の日本人がとった「不可解な」行動の詳細と人類文化学者による解釈を見ておきたい。

日本人は最高度に、喧嘩好きであるとともにおとなしく、軍国主義的であるとともに耽美的であり、不遜であるとともに礼儀正しく、頑固であるとともに順応性に富み、従順であるとともにうるさくごつき回されることを憤り、忠実であるとともに不忠実であり、勇敢であるとともに臆病であり、保守的であるとともに新しいものを喜んで迎え入れる。彼らは自分の行動を他人がどう思うだろうか、ということを恐ろしく気にかけると同時に、他人に自分の不行跡が知られないときには罪の誘惑に負かされる彼らの兵士は徹底的に訓練されるが、しかしまた反抗的である。²⁵

周作人と同様に、日本人の二面性を感じていたルース・ベネディクトは日本人や日本社会、日本文化におけるさまざまな事象を分析、研究を重ねた後、下記のような解釈を行っている。

彼らは人間には二通りの魂があると信じているが、それは互いに争い合う善の衝動と悪の衝動ではない。それは「柔和な」魂（和魂）と「荒々しい」魂（荒魂）とであって、すべての人間の——またすべての国民の——生涯には「柔和」であるべき場合と、「荒々しい」であるべき場合とがある。一方の魂が地獄に、他方が天国に行くことと定まっているのではない。この二つの魂はともに、それぞれ異なった場合に必要であり、善である。²⁶

また、このような矛盾した現象は「深く彼らの人生観の中に根を下ろしている」とルース・ベネディクト結論にたどり着けた。上記の理論に基づけば、佐藤春夫がいう「上品」と「下品」の二種類の日本人は存在せず、存在するのは和魂と荒魂、つまり「上品」と「下品」の二面性が共存する日本人になる。

一方では、『古事記』や『遠野物語』などを研究していた周作人は日本文明、日本国民の感情と生活の根元を掘り出し、ルース・ベネディクトと正反対の方向からその二面性を解明しようとしたのである。

IV. 1920～30年代の日本における忠君愛国の二面性

1. 「日本管窺」における万世一系論の表の意味

1935年、周作人は「日本管窺」の中で日本における忠君愛国の精神は国民性ではなく一時的な習性であると位置付けた。そのうえ、日本人の古今不変な国民性は次の二点であると主張した。第一に、中国と共通する現世主義があるとし、第二に、中国には欠如する美に対する愛好があると明言している。

実は、彼がその持論を唱えたのは1925年に発表した「日本的人情美」からである。しかし、下記の通り、十年の歳月を経るにつれて当初眼中になかった日本における忠君愛国の精神に対する認識について変化が生じ始めた。

私は以前から反対だった。これは一時の習慣であって、国民性などとは言えぬように思えたのだ。…ただ、このごろ別に感ずるところがあり、…万世一系の事実の重要は認めることにした。日本のことを理解するにはこの一事に注意せざるをえない。日本と中国の思想が少々くいちがう原因はほぼこのところに発していると、考えられるからである。²⁷

周作人は日本の万世一系の制度を認めただけでなく、それを理解することこそが日中における思想上の差異を解くカギであると力説するようになった。このように切り出した周作人

の万世一系論は、異民族に征服された経験の有無によって形成された日中の両国民の性情の差を比較しながら展開していく。その後、皇室と国権を考察し、武士専権の歴史を概観し、やがて当時の日本における軍国主義は「幕府の復活」であると見なした。さらに、武士道にある君臣主従の義を論じ、日本における武士道の墮落を嘆いた。上記のことについては木山英雄と劉岸偉の研究によって明らかになっている。

また、周作人の論考について、木山英雄と劉岸偉は周作人が日本の信仰に対する理解を示したことを評価しているが、万世一系に対する理解が当時の日本国の国体制を理解することに繋がったと位置づけることに留まっている。その他、劉岸偉が「しばしば自国との対照、自国への批判という文脈で語られており、文明の本質を民族の過去の体験、歴史的伝統との連続性においてとらえようとする彼の思考様式をも示している。」と指摘している。

表からみて、周作人の万世一系論は上記の内容と木山氏、劉氏が指摘する通りではあるが、裏から見るとまた別な意味が汲み取れる。

2. 「日本管窺」における万世一系論の裏の意味と忠君愛国の二面性

まず、中国における忠君愛国の言葉の意味を説明しておきたい。本来、忠は春秋時代の孔子の「君使臣以礼、臣事君以忠」に由来し、戦国時代の孟子の「民為貴、社稷次之、君為輕」の思想に引き合わせると、君臣の関係は礼と忠を持って平等に接し、民を大事にすることによって国を治めるという意味を持つ。その時代では無論、忠君と愛国は別の意味合いを持っていた。しかし、封建専権制の強まりによって忠君愛国は次第に一体化されていった。国は民がいてこそその国という意味から君主が治める国へと転換していった。宋の時代では忠は臣下が君主に対する一方的な絶対服従の思想になってしまった。つまり、忠君愛国とは君主に対する一方的で絶対服従の思想のことである。周作人の日本における忠君愛国は一時的なものであるという主張はこのような意味合いに基づいていると思われる。

「日本管窺」では、周作人が「日本的人情美」で述べた主張を貫くが、一方では、日本における万世一系の制度を論じ始めていた。また、それを論ずる際、国に対する感情と君主に対する感情の二点に分け、自らの論を展開している。それは裏を返せば日本固有の「忠君愛国」である。つまり、「日本的人情美」で一時的な習性であると位置づけた忠君愛国という精神が違う意味で存在するというのである。

彼は第一に国に対する感情論では次のように述べている。日本は地理的な有利性に恵まれ、異民族に征服されることがないため、清らかな国土を有し、剛健で実直な国民性が育まれた。国民は自らの国土に対する純粋な愛着を持っている。しかし、一方では、地理的な有利性から軍国的欲望を膨らませることもある。つまり、日本における愛国は愛国土と愛軍国の二つの意味を持つ。前者は自然で持続的なものであり、後者は軍国主義が横行する場合に生じる一時的なものである。

つぎに、君主に対する感情論では、

さて第二は、君に対する感情である。日本には今もって皇族、華族、士族、平民の四階級があるのに、普通には古来天皇を族長とする一個の大家族のようにいっている。民間

にも君民一体の信仰があり、また事実としても歴代本族一姓の元首を戴いてきた。その間におのずとある種の感情が発生した事情は、他の国とかなりちがうところで、それはより真情に近く、公式離れのしたものかと思われる。…天皇は従来虚位を擁するばかりで、何もとりしきってこなかったからこそ、人民は彼に対して好い感情だけを持ち、あらゆる政治上の善悪はすべて幕府の責任ということになり、…歴代天皇には実権がなかったが人民の天皇に対する感情は深い、というのは本当のことである。…²⁸

周作人は、日本国民は一つの大家族であり、天皇はその族長に当たるため、民間にある君民一体の信仰を合わせて族長に自然な感情が生じていると考えた。他の国とは異なり、日本の場合には族長に相当する天皇には深厚かつ真誠な敬愛を捧げ、形式的なものではないとみた。そのうえ、国の実権を握らない天皇に対し、国民が好感しか寄せず、だからこそ日本人が無条件、無制限に天皇に従うという日本式な「忠君」ができたのだと述べている。つまり、日中における忠君思想の根本的な相違は君主に対する異なる感情である。周作人自身が、留学中に日本の皇室が外出先で一般庶民と礼を交わす場面を目の当たりにしたことがある。それを振り返りながら、当時の日本の皇室と国民との関係に敬服し、平和の象徴であると実感した自らの心情を明かしている。しかし、時代が変わり、皇室の外出には厳重な警備を強いられている現状を知り、政府が日本国民の信と愛を奪ったことについて嘆いていた。

周作人が指摘するような裏にある「忠君」は無論、武士道にある君臣主従の忠君とは異なることは言うまでもないが、前者は神聖かつ自発的である「忠君」に対し（孔孟時代の「忠君」とある意味では共通する）、後者は封建体制に組み込まれた形式的な忠君である。そもそも両者とも中国からの輸入物であることも興味深いことである。前述した愛国には二つの意味が含まれることから考えても、当時の日本には表舞台に一時的な忠君愛国が存在し、その裏には、万世一系から生まれている族長にあたる君主を敬愛し、清らかな国土を愛するという「忠君愛国」も存在していることになる。

3. 外国人が万世一系を理解する意義

木山英雄が「中国人としてはかねて解しかねる『万世一系』の信仰も事実の上で精一杯認めてみる。」と指摘しているが、実は、「かねて解しかねる」のは中国人ばかりではない。

ルース・ベネディクトの『菊と刀』によれば、アメリカの一部の学者たちも「日本の封建時代七百年の全期間を通じて天皇は影のごとき存在、たんに名目だけの元首であったにすぎない」ことを突き止め、歴史に照合すれば「天皇は存在しないのも同然であった。」とし、「天皇は日本が最近になってからでっち上げた邪悪な指導者」だと主張していた。西洋人にとっても中国人と同様に実権を伴わない君主に対する崇愛というものはそれらの想像を超越したものであった。周作人も天皇に関わる歴史を考察する際、日本の将軍が政治の実権を手に入れば満足し、皇位には欲望を見せないことに対する驚きを綴っている。『菊と刀』の中で、日本人が天皇に捧げる敬愛について、西洋人が戸惑っていたことを著す記述はほかにある。

日本人の態度に関する問題の中でもっとも有名なものは、彼らが天皇陛下に対する態度であった。…戦争中でも日本人は政府や大本営や、めいめいの直接の上長に対して批判を加えた。…ところが、天皇だけは批判を免れた。天皇の最高至上の地位はごく近年のものであるにかかわらず、どうしてこんなことがありうるのであろうか。日本人の性格の中の、どういう奇矯さが天皇をしてあのように神聖不可侵の地位を確保せしめているのであろうか。…すべての人（日本人）が一致して天皇批判を超越したものとしていることは、人間ならば、どんな人に対しても懐疑的な穿鑿と批判の除外例を認めないアメリカ人にはいかさまらしく思われた。

ルース・ベネディクトは、日本人の意識に関する専門的な調査を続けた結果、最終的に「日本人にとっては皇室に捧げられる崇敬と軍国主義ならびに侵略的戦争政策とは切り離しうるものだが、日本から切り離すことのできないものである。」と万世一系の制度への理解を示している。ルース・ベネディクトは文化人類学者であったため、自分と異なる文化や異なる制度に対する理解を示すことができたのかもしれない。しかし、驚くべきことに、一文学者である周作人もまた、彼女と同じように日本の万世一系の制度に対して理解を示していた。そのことに関しては感服せずにはいられない。

4. 万世一系に理解を示す経路

外国人が万世一系の制度を理解する鍵は日本社会に見られる特有な権力の二重性を理解することである。周作人がどのようにしてその特有な権力の二重性に気づき、理解していたかについて考えてみたい。

ルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で次のことを明らかにしている。「日本の婦人はその夫の後ろに従って歩き、社会的地位も夫より低い」、一方では「他の大部分のアジア諸国に比べれば大きな自由を持っている。」その大きな自由とは「一家の財布を預かっている」ことだけでなく、自らの判断で家財を質屋に出し、家計に回すということもできれば、子どもの結婚に対する発言権を持っているということでもある。つまり、日本社会においては身分による権力と実質的な権力という二つの権力が共存しているのである。

それに対し中国の家父長制度では家父長が実権を握り、家族全員がそれに従うということが徹底的に行われていた。つまり、中国社会では身分による権力と実質的な権力が一体化しているのが一般的である。

日中両国において、家庭内部における階層制度はいずれもそれぞれの国家体制の縮小版である。日本の場合、夫は家庭内の「天皇」役で、その妻は「将軍」役、子供たちは「国民」役と考えれば、その関係がよくわかる。身分上では夫が断固たる家の主であり、家庭を統括しているように見えるが、実際には内部でその妻が家庭の実権を握っている。夫(天皇)と妻(将軍)は、身分による権力と実質的な権力が持ち合い、互いに牽制し合ってバランスをとっている。子供たち(国民)はどちらも無視できないが、実権を握っていない夫(天皇)に親近感を持つことができる。

周知のように、周作人は日本人の女性を娶っている。魯迅との絶縁事件でその夫人が周家

の「財務大臣」であることが世間に知られるようになった。日本社会において単なる役割分担にすぎないそのことについて、中国社会は周作人が情けないと過剰に反応していた。つまり、当時の中国において、家庭内の実権を握っていない夫は尊敬されないのである。周作人が日本人の女性を娶ったことで、家庭において日本に特有な権力の二重性があることができたとも考えられる。しかし、実際には文学作品の中でそれを理解した可能性が高い。

周作人が柳田国男の民俗学に心酔していることはよく知られている。彼はその国の国民性を知るには民俗学を知ることから始めなければならないと主張している。実際、彼は「日本的人情美」を発表した翌年の1926年に『古事記』の「神代巻」の三分の二を翻訳発表し、1932に柳田の『遠野物語』の抄訳と紹介²⁹を行っている。また、彼の和書購入歴には三つの高潮期がある³⁰。その中の二つが「日本的人情美」と「日本管窺」の発表時期と重なっている。文献研究を通じて忠君愛国思想が日本の国民性と思われる理由を突き止めようとした可能性が高いと思われる。

『古事記』と『遠野物語』の関連について、吉本隆明は「わが歴史論 柳田思想と日本人」で明記している。吉本隆明は、日本の神話における天皇制のあり方について下記の三つの場合があると指摘する。

- 一、王家の姉妹は神様のお告げを取り次いで、それに従って兄弟の方は政治を司る。
- 二、十代までの初期天皇では兄が神事を司る宗教者で、その弟は天皇になって国を司る。
- 三、家の制度は母系制で、公的政治の制度は男・男制である。

いずれも権力における二重性が見られる。また、柳田国男の民俗学の中にもそれに類似する制度が記されている。地方の神社を中心に当番の社家があるが、その社家では兄弟をもって、村の世話役と神事を司る。

吉本氏の研究で権力の二重性という現象は天皇制に限らず、日本の民間の至る所に深く浸透していることが明らかにされている。つまり、日本の社会構造の特色は二重性にある。周作人も『古事記』と『遠野物語』を通じて日本特有のこの社会構造における二重性から忠君愛国思想の二面性を理解したと考えられる。であるとすれば、彼は日本国民個人の内部にも二面性が潜んでいることを察知していた可能性が非常に高いのである。

V. 結びと今後の課題

本稿では、まず周作人を同時代の中国文学者と比較し、彼の日本観を浮き彫りにした。そのうえで、1920～30年代における、愛着と憎悪といった正反対の周作人の日本人観および1920～30年代の日本人の行動に対する彼の苦慮について考察した。最後に、彼が日本の古典文学や民俗学などに日本人の国民性を追求する道を求め、日本社会における特有の権力の二重性を解明し理解を示したことを明らかにした。

当初、1920～30年代の日本人の行動における二面性を苦慮した周作人であったが、その文学においてその二面性を示すことを示唆すると思われるキーワードが多く見られる。例えば、「二つの鬼」(1926)にある「流氓と紳士」や『『沢瀉集』序』(1927)にある「叛徒と隠士」、「性的解放①北溝沿通信」(1927)にある「母婦と娼婦」などなどである。いずれも

『古事記』と『遠野物語』の研究を行った後に執筆されたものである。これらを『菊と刀』の中の言葉を借りて言えば、日本人が信じる善と悪の二通りの魂の共存である。どちらの魂も善であると考えているが、その場にふさわしいものが積極的に働く。周作人はそれを理解し、共鳴していると思われるが、その詳しい研究を次回の課題にしたい。

参考文献

- 銭理群『周作人伝』北京十月文芸出版社 1990
 吉本隆明『定本 柳田国男論』洋泉社 1995
 周作人著 木山英雄編訳『日本談義集』東洋文庫 2002
 銭理群『周作人研究二十一講』中華書局 2004
 ルース・ベネディクト 著 長谷川松治訳『菊と刀』講談社学術文庫 2005
 哈迎飛『半是儒家半是积家 --周作人思想研究』人民文学出版社 2007
 鐘叔河編訂『周作人散文全集』広西師範大学出版社 2009
 劉岸偉『周作人伝 ある知日派文人の精神史』ミネルヴァ書房 2011
 伊藤徳也『「生活の芸術」と周作人 中国デカダンス＝モダニティ』2012
 韓玲姫・綿拔豊昭和「周作人の購入書籍に関する考察 日本文学を中心に」『情報メディア研究』2012
 木山英雄『周作人「対日協力」の顛末 補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』岩波書店 2015

注

- 1 1936.9.16 日刊『宇宙風』第25期に掲載し、署名は知堂。後に『瓜豆集』に収録。
- 2 木山英雄編訳『日本談義集』東洋文庫 701 平凡社 2002 p.278 による。原文は「我在东京只继续住过六年，但是我爱好那个地方，有第二故乡之感。」
- 3 1882-1938、浙江省海寧出身。1901年日本留学、1906年ドイツ留学、帰国後保定陸軍軍官学校校長に就任。
- 4 蔣百里『日本人：一个外国人的研究』漢口の『大公報』に連載された後 1938.9 に出版。本稿が参考したのは尤炳圻訳内山完造著『一个日本人的中国观』新星出版社 2015 に付録されているもの。p.130、拙訳。原文は「从日本人的习惯，诸如洗澡，衣服，饮食，居住来看，日本人种无疑地是从南方移去的。其间当然也有一部分从北方——中国山东与高丽的移民，但这并不是主流。所以北方的风格，在日本是看不见的。事实上，北方的寒苦生活，非日本人所能接受。……中国的东三省——“满洲”二十年前，日本就想移民，五年来他可以自由移民。但统计数字的雄辩，确实告诉我们，日本这种移民企图怎样的失败。日本人怎样的不愿到北方去！」
- 5 銭理群『周作人伝』北京十月文芸出版社 1990 P.116
- 6 胡令遠・王盈「周作人の日本研究における江南文化の意義」『上海シンポジウム 2011』国際日本文化センター 2012
- 7 1925.10.10 日刊『京報副刊』に掲載。署名は周作人。後に『談虎集』に収録。

- 8 同2、p.61による。原文は「日本の新文学、也足以供我们不少的帮助…他的新文学发达的历史也和中国仿佛，所以不同者只是动手得早，进步得快。因此，我们翻看明治文学史，不禁恍然若失，如见一幅幅的推背图，预示中国将来三十年的文坛运势…在近二十五年所走的路差不多与日本一样，到了现在刚才走到明治三十年 1897 左右的样子，虽然我们自已以为中华民国的新文学已经是到了黄金时代了。日本替我们保存好些古代的文化，又替我们去试验新兴的文化，都足以资我们的利用，但是我们对于自己的闾茸堕落也就应该更深深地感到了。」
- 9 1936.9.16日刊『宇宙風』第25期に掲載し、署名は知堂。後に『瓜豆集』に収録。
- 10 同2、p.276による。原文は「正因为对于乡国有情，所以至于那么无情似的谴责或怨嗟…对于故乡，对于祖国，我觉得不能用今天天气哈哈的态度。若是外国，当然应当客气一点才行，虽然无需瞻恭维，也总不必求全责备，以致吹毛求疵罢。」
- 11 1879-1936 中国江西省出身。1901 年举人に合格。1902 年、弘文学院師範科に、1904 年、法政大学速成法政科に留学。帰国後孫文に仕える。
- 12 蒋百里、戴季陶、劉文典著『日本人与日本論』北方文芸出版社 2015 p.42 による。拙訳。原文は「地理是接近的，文字是一半相同的，风俗习惯是相去不远的……」
- 13 同4。p.156、拙訳。原文は次の通りである。「假如从日本文明中除去了欧美输入的机器与科学，中国，印度输入的文字与思想，还剩下些什么……」
- 14 「日本と中国」1925.10.10 刊『京報副刊』に掲載。署名は周作人。後に『談虎集』に収録。本稿の日本語訳は山本英雄編訳『日本談義集』東洋文庫 701 平凡社 2002 p.62 による。原文は「中国与日本并不是什么同种同文，但是因为文化交通的缘故，思想到底容易了解些，文字也容易学些，(虽然我又觉得日本文中夹着汉字是中国人不能深切地了解日本的一个障害)」
- 15 同上、p.59 による。原文は「中国在他特殊的地位上特别有了解日本的必要与可能，但事实上却并不然，大家都轻视日本文化，以为古代史模仿中国，现代是模仿西洋，不值得一看。日本古今的文化诚然是取材于中国与西洋，却经过一番调剂，成为他自己的东西，正如罗马文明之出于希腊而自成一派，(或者日本的成功还过于罗马，)所以我们尽可以说日本自有他的文明，在艺术与生活方面更为显著，虽然没有什么哲学思想。我们中国除了把他当作一种民族文明去公平的研究之外，还当特别注意，因为他有许多地方足以供我们研究本国古今文化之参考。从实利这一点来说，日本文化也是中国人现今所不可忽略的一种研究。」
- 16 蒋百里、戴季陶、劉文典著『日本人与日本論』北方文芸出版社 2015 p.41 による。拙訳。原文は「我们一搜查中国留欧学生关于批评欧洲有系统的研究，较为成器的著作，好像还未出世。」
- 17 同2、p.62-63 による。原文は「中国人原有一种自大心，不很适合研究外国的文化，少数的人能够把它抑制住，略为平心静气地观察，但是到了自尊心受了伤的时候，也就不能再冷静了。」
- 18 福沢諭吉が『学問のすすめ』の初編(1872)で下記のように述べている。しかるを支那人などのごとく、わが国よりほかに国なきごとく、外国の人を見ればひとくちに夷狄夷狄と唱え、四足にてあるく畜類のようにこれを賤しめこれを嫌い、自国の力をも計らずしてみだりに外国人を追い払わんとし、かえってその夷狄に窘められるなどの始末は、実に国の分限を知らず、一人の身の上にて言えば天然の自由を達せずしてわがまま放蕩に陥る者と言うべし。
- 19 千葉俊二編『谷崎潤一郎上海交遊記』みすず書房 2004 p.17-19
- 20 『支那雑誌』大道書房 1941 p.29-30

- 21 これに関しては木山英雄の『周作人「対日協力」の顛末補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』と『日本談義集』および劉岸偉『周作人伝 ある知日派文人の精神史』のほうが詳しい。
- 22 木山英雄『周作人「対日協力」の顛末補注『北京苦住庵記』ならびに後日編』岩波書店
- 23 同2、p.334-335による。原文は「留学过日本的人…在相当时间与日本的生活和文化接触之后，大抵都发生一种好感。…可是他如回到本国来，见到有些事与他平素所有的日本印象不符的时候，那么他便敏捷的感到，比不知道日本的人更深的感觉不满……此其一。还有所谓支那通，追随英美的传教师以著书宣扬中国的恶德为事，于记述嫖赌鸦片之外，或摘取春秋列国以及三国志故事为资料，信口谩骂，不懂日文者不能知，或知之而以为外国文人之常，亦不敢怪，留学生则知日本国内不如此，对于西洋亦不如此，便自不免心中不服，渐由小事成大问题矣，此其二。」
- 24 拙訳。周作人の「我的杂学十四」1944.7.5による。本文は「我们对日本感觉兴味，想要了解他的事情，在文学艺术方面摸索很久以后觉得事半功倍必须着手于国民感情生活，才有入处，我以为宗教最是重要，急切不能直入，则先注意于其上下四旁，民间传承正是绝好的一条路径。」
- 25 ルース・ベネディクト著長谷川松治訳『菊と刀』講談社学術文庫 2005 p.12
- 26 同上 p.232
- 27 同2、p.175-176による。原文は「我从前很不以为然，觉得这是一时的习性，不能说是国民性。……但近来别有感到的地方，……万世一系的事实我却承认其重要性，以为要了解日本的事情对于这件事非加注意不可，因为我想日本与中国的思想有些歧异的原因差不多就从这里出发的。」
- 28 同2、p.180-182による。原文は「再说其二是对君的感情。日本现在虽然还有皇族华族士族平民四个阶级，普通总说古来是一大家族，天皇就是族长，民间亦有君民一体的信仰，事实上又历来戴着本族一姓的元首，其间自然发生一种感情，比别国的情形多少不同，或更是真情而非公式的。……因为天皇向来只虚位不管事，所以人民对于他只有好感情，一切政事上的好坏都由幕府负责任，……历来天皇虽无实权，人民对于天皇的感情则很深厚。……」
- 29 「苦茶随筆」『東方雑誌』（第二九卷第二期）1932.1.16
- 30 韓玲姫 綿拔豊昭和「周作人の購入書籍に関する考察 日本文学を中心に」『情報メディア研究』11(1), 2012 p.3
- 31 吉本隆明『定本 柳田国男論』洋泉社 1995